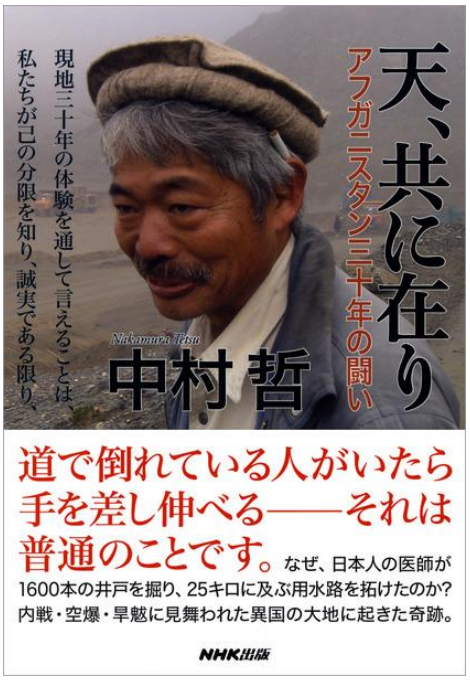
『天、共に在り　アフガニスタン三十年の闘い』　中村 哲著



世界の果てで活躍している日本人は枚挙にいとまがないが、しかし、内戦や他国軍の侵攻による戦乱で国土が荒廃、何百万人単位の住民が難民となって隣国に逃げ込み、国も無政府状態となって破綻したアフガニスタンの熱砂の砂漠地帯で、延々３０年間に亘って飲料水用の井戸を掘り続け、また砂漠農地化のための灌漑用水路を掘り続けて、離散した多数の難民を故郷に呼び戻した一日本人のことは余り知られていない。

書かれている内容が山の話題ではないのでここで紹介するのも気が引けるが、我々が海外の山に登らせて貰う時の地元住民との付き合い方に関しても示唆に富む記述も多いので、あえて紹介する所以である。

著者は元々はパキスタンのペシャワールに派遣された医師で、当地に蔓延していたハンセン氏病の治療に当るとともに、広大な山奥に無医地区が広がる隣国アフガニスタンの死の谷にも診療所を拡げていって、奥地民族の治療に当った。

しかし、2000 年春に中央アジア全体が未曽有の大旱魃に見舞われて以来、アフガニスタンでも農地が砂漠化して食糧生産量が激減、幼児を主とする百万人の人々が餓死・病死、また家畜の９割以上が死滅、農民たちは続々と村を捨てて流民化し百万人単位の難民が発生した。このような状況下で、著者は住民の命を守るためには医療行為よりも先に、飲料水と農地を潤す灌漑用水の恒常的な確保が何よりも先決と考えて、関係筋を説き廻って井戸と用水路の掘削を実行した。本書はその苦闘の記録である。

９・１１アメリカ同時多発テロの報復としての米英によるタリバン攻撃はタリバンの根拠地であるアフガニスタン・パキスタン国境地域のジャララバードやペシャワールに集中し、無人機やミサイルによる無差別攻撃が現地の治安を一層悪化させる中で、全ての外国支援組織が現地撤退した後も、独り著者が率いる日本の支援組織だけが激甚の空爆下で現地の住民と共に 1600 本の井戸を掘り続け、延長 25km に及ぶ灌漑用水路を開削し続けた。土木機械も重機も無く全て人手での気が遠くなるような作業を命の危険に曝されながら継続したその原動力は何だったのであろうか。「はじめに」と終章に記された次の文章が印象的であった。我々が誤解している（かも知れない）イスラムの原理“アッラー・アクバル（神は偉大なり）”の思想が多少は分かったような気もした。

「・・現地３０年の体験を通して言えることは、私達が己の分限を知り、誠実である限り、天の恵みと人のまごころは信頼に足るということです」（はじめに）。

「・・『天、共に在り』。それは人間内部にもあって生命の営みを律する厳然たる摂理であり、恵みである。科学や経済、医学や農業、あらゆる人の営みが、自然と人、人と人との和解を探る以外、我々が生き延びる道はないであろう。それがまっとうな文明だと信じている」（終章）

2015 年「梅棹忠夫 山と探検文学賞」受賞作品。ＮＨＫ出版 2013 年刊　1600 円　　（酎）